



**Press Release**  
**HBC 北海道放送株式会社**

※「ガッチャンコ」とは…  
「くっつける」「ひとつになる」という意味で使われる言葉。  
HBCが、人と人、地域と地域を「つなぐ」存在でありたい  
という願いがこめられています。

2021年9月21日

## 第21回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞 最終候補 ノミネート！ HBC制作ドキュメンタリー 「ネアンデルタール人は核の夢を見るか ～高レベル放射性廃棄物の行方～」

HBC北海道放送が制作したテレビドキュメンタリー「ネアンデルタール人は核の夢を見るか～高レベル放射性廃棄物の行方～」が第21回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞(主催 早稲田大学)のファイナリスト(最終候補)にノミネートされました。この賞には164作品の推薦・応募があり、10作品がファイナリストに選ばれています。最終選考会は10月下旬に行われる予定です。

【番組名】「ネアンデルタール人は核の夢を見るか ～高レベル放射性廃棄物の行方～」

【放送日時】 5月29日(土)午後4時～午後5時

【内容】

2020年8月、原子力発電所から出る高レベル放射性廃棄物、いわゆる核のごみの最終処分場選定の応募に向けて、北海道寿都町が動き出した。調査応募の賛否で町が分断されていくなか、町長は「肌感覚では賛成が多い」と判断して、わずか2か月で応募に踏み切った。

番組では地層処分に至るまでの最終処分の原点にさかのぼり、1980年代に秘密裏に行われた調査や元職員の証言のほか、最終処分場の適地をめぐる新たな動きを独自に伝えた。

寿都町の吉野寿彦さんは、長年の友人だった町議会議長らのリコール運動の準備を始めた。大串伸吾さんは反対の立場から、役場を辞める決断をした。大串さんの息子は住民説明会で、町長に率直な質問をぶつけた。平穏に暮らしていた町民たちは、いま核のごみとどう向き合うのか。

地質や地震の専門家は、「地下の危うさ」を指摘する。10万年後まで私たちは責任をもって核のごみを処分できるのか。未来に残せない宿題が、突きつけられている。

※番組はHBCニュースの公式YouTubeで視聴することができます。

◆お問い合わせ：HBC北海道放送経営企画局広報CSR部

(TEL:011-232-5821)